http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.307　17/12/06

言語の線条性

学年集会の時にもちょっと触れたが、進路通信に掲載のＫ先生の「ペップトーク」の話は、なるほどと思わせられて面白かった。ただ、それに関連して私が話したことは、よ～く考えてみるとちょっと違うかな…という気もしてきたので、補足してみよう。

Ｋ先生の原稿には、

> 例えば、「皆さん、よろしいですか、ピンク色のアフリカ象をイメージしないでください。」と言われると、「ピンク色のアフリカ象を」と言った時点でそれが目的語になっているため、イメージするのはピンク色の象となる。

と書かれている。集会の時、それを私は「言語の線条性」でもあると言い換えてみた。言語の線条性とは、

> 言語は素材として音声を用いている。人間は同時に二つの音を発することができないので、音声言語は必然的に継起的、つまりひとつづきにならざるを得ない。この言語の必然的な性質を線条性という。

とネットに出ている。ついでに、

> これ（線条性）は、記号が鎖のように一列に並ぶ様を指摘しました。日本語で言えば、左から順に読むように一列に並んでいますが、線状性とはこの並びのことを指しています。
>
> この線状性は、複合語の問題に触れるとよくわかります。例えば「おじさんハゲ」と「ハゲおじさん」とでは意味が変わってくるのがわかると思います。前者がおじさんを指すのではなく「禿げたおじさんのような**禿げ方**」というのに対し、後者は「禿げた**おじさん**」そのものを指すのです。

挙げられている例はどうかと思うが（笑）分かりやすい解説だろう。

このことを、私たちの言語理解に関わらせて言い換えると、例えば、絵画なら一枚の面としてすべての情報を一度にキャッチすることができるが、文章は、それを一続きの線として、順番に読み進んでいかなければ情報を得ることができないといったことになる。

そのため、必然的に「前に」出てきたことから理解・イメージすることになるので、Ｋ先生の例でいうと、「イメージしないで下さい」の前に「ピンク色のアフリカ象」が来てしまっていることがポイントなのだろうと思ったわけである。

でも、よく考えてみると、「イメージしないで下さい、ピンク色のアフリカ象を。」と倒置の形にしても、結局はピンク色のアフリカ象が思い浮かぶわけだから、やはり「線条性」というよりも、「日本語は目的語がイメージになる」というのが正しそうである。

＊

百人一首を編集した藤原定家に、

> 見渡せば花も紅葉もなかりけり
> 浦の苫屋の秋の夕暮れ

という名歌がある。もうお分かりだろうと思うが、この歌で歌われている情景は、まるで水墨画のような寂しい秋の夕暮れの海辺である。しかし、読者は線条的に「花も紅葉も」と読み進むために、まずは頭の中に花と紅葉の美しい映像を浮かび上がらせてしまうのである。それが否定されるからこそ、秋の夕暮れの寂しさが際立つというわけだ。「言語の線条性」を生かした名歌といえよう。